



辟雍第14号  
東京学芸大学辟雍会機関誌

Copyright © 2017 Hekiyoukai All Rights Reserved.

[www.hekiyou.com](http://www.hekiyou.com)

# 辟雍 第14号

## 目次

会長挨拶	2
沿革	3
支部便り	4
支部連絡先一覧	11
卒業生から	12
ヤギの賜物	24
辟雍会奨学金について	26
平成29年度各部活動報告	27
あとがき	28



本会は東京学芸大学の学部等の学生、  
同窓生、教職員で構成されています



けやき通りから学芸大東門を望む

## 会長挨拶



最近、日本の歴史が大きな転換期を迎えていくとつくづく感じることがあります。一つは「戦争体験の風化」がますます現実味を帯びてきているということですが、先頃、開催された戦没者慰靈祭に参加した戦争体験者がほんのわずかになってしまったことにもそれは象徴的に示されているように思います。戦争の記憶が次第に他人事のように受け止められ、悲惨な戦争体験に基づいて形成された日本人の強烈な平和への希求が重要な精神的支柱であった時代が過ぎ去ろうとしています。かくいう私もすでに古稀を過ぎ、高齢者の仲間入りをしている戦後世代です。そういう時代になったからこそ、「戦後」という歴史的枠組が転換を迫られるようになっているということかも知れません。

また、昨今、東アジアではきな臭い話が続いている。北朝鮮がICBMをはじめとするミサイル発射実験や核実験を繰り返す一方で、それへの対抗措置としてアメリカが北朝鮮を攻撃し、政府を転覆させることさえほのめかしています。こういう折に国連で核兵器禁止条約が締結されたことは画期的なことですが、唯一の被爆国である日本が他の核保有国などと並んでこの条約に参加しないというのは、何とも情けない話です。本来ならば、日本こそが核兵器の全廃に向けた運動の先頭に立つべきでしょう。

私たちは、こうした時代だからこそ、「新しい平和

教育」を真剣に模索する必要があるように思います。日本はそうした平和教育で世界をリードする国になるべきでしょうし、東京学芸大学がそのまた中心校として確固たる地位を築くことを期待します。

今年(2017年)の5月に、辟雍会事務所のある20周年記念会館の修築費を全額提供していただいた飯島和さん(元東京女子師範学校卒、ヤマザキパン株式会社初代社長夫人)が永眠されました。102歳のご高齢でした。現在、辟雍会事務所の前には、緑豊かな学芸大学の構内でも格別に緑が美しい「飯島和日本庭園」があります。学芸大学の学生はもちろん、外から大学を訪れる機会のある卒業生や関係者の方々は、是非一度この庭園を訪ねてみてください。そして、記念館1階の玄関に置かれている飯島和さんの自伝的歌集(『武藏野の野辺に立ちて』)を紐解いてください。飯島さんのお人柄が偲ばれる好著です。

交流事業や就職支援などで学生の自発的活動が下火になってきていることは淋しいことですが、今年は辟雍会事業として二つの学生支援事業を新たに開始することができました。一つは、経済的に厳しい状況にある学生の学習支援を目的にして辟雍会奨学金制度を設けたことです。初年度の今年は60名もの応募者があり、その約半数の人に奨学金を支給しました。もう一つは、大学との共催事業として学生の近県学校訪問を実施する運びになったことです。これは学生の教職に対する理解を高めることを目的にしたもので、本会の副会長や幹事長の方々に中心的な役割を担ってもらっています。

また、就任当初、私が抱負とした辟雍会ネットワーク作りは、まだまだ途遠しといった状況ですが、韓国・中国をはじめ外国の辟雍会支部が結成できる日も遠からず来るよう思います。

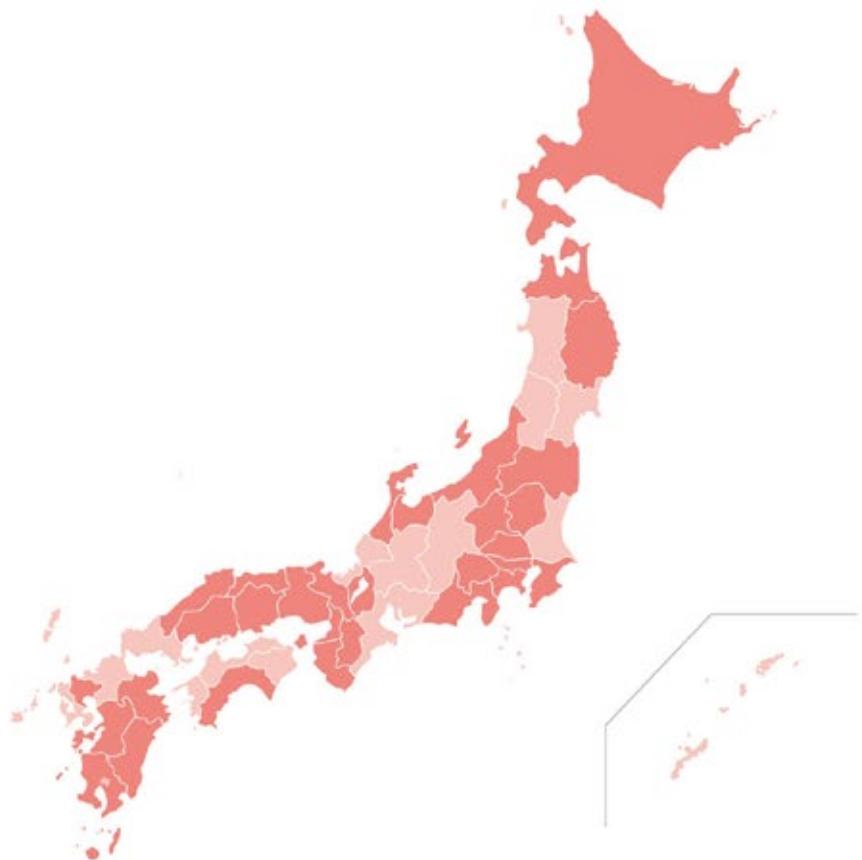
多くの方々が辟雍会活動に積極的に参加されることによって、本会がますます充実した体様を備え、東京学芸大学とともに発展していくこと願っています。

2017年  
馬渕 貞利



## 沿革

2003.11.03(平成15)	「辟雍会(東京学芸大学全国同窓会)」創立 荒尾頼秀会長就任
2003.12.07(平成15)	青森県支部設立
2005.07.02(平成16)	石川県支部設立
2005.08.22(平成16)	富山県支部設立
2005.10.01(平成16)	岩手県支部設立
2006.02.25(平成18)	千葉県支部設立
2006.04.01(平成18)	荒尾頼秀会長再任(2期目)
2006.10.01(平成18)	鳥取県支部設立
2007.06.24(平成19)	高知県支部設立
2008.04.01(平成20)	長谷川貞夫会長就任
2009.08.01(平成21)	北海道支部設立
2009.10.31(平成21)	東京学芸大学創立60周年記念シンポジウムを大学と共に催す
2010.04.01(平成22)	鶴山基彦会長就任
2011.01.29(平成23)	岡山県支部設立
2011.02.27(平成23)	鳥取県支部設立
2011.03.26(平成23)	静岡県支部設立
2011.08.28(平成23)	新潟県支部設立
2011.10.30(平成23)	広島県支部設立
2011.11.26(平成23)	神奈川県支部設立
2012.04.01(平成24)	鶴山基彦会長再任(2期目)
2012.08.17(平成24)	山梨県支部設立
2012.10.07(平成24)	鹿児島県支部設立
2013.07.27(平成25)	群馬県支部設立
2013.08.11(平成25)	中国の留学生同窓会「東京学芸大学留学生北京聚會」開催
2013.10.26(平成25)	近畿支部設立
2013.11.02(平成25)	本会を「東京学芸大学辟雍会」と改称 本会創立10周年記念祝賀会開催
	辟雍会創立10周年記念『辟雍』第10号発行
2014.03.15(平成26)	佐賀県支部設立
2014.04.01(平成26)	鶴山基彦会長再任(3期目)
2014.06.15(平成26)	栃木県支部設立
2014.10.11(平成26)	熊本県支部設立
2014.11.08(平成26)	大分県支部設立
2015.05.31(平成27)	埼玉県支部設立
2016.02.20(平成28)	宮崎県支部設立
2016.04.01(平成28)	馬渕貞利会長就任



## 各支部の設立状況

番号	名称	設立年月日
1	青森県支部	2003.12.07 (平成 15)
2	石川県支部	2005.07.02 (平成 17)
3	富山県支部「獅子の会」	2005.08.22 (平成 17)
4	岩手県支部	2005.10.01 (平成 17)
5	千葉県(船橋)支部	2006.02.25 (平成 18)
6	島根県支部	2006.10.01 (平成 18)
7	高知県支部「高知辟雍会」	2007.06.24 (平成 19)
8	北海道支部	2009.08.01 (平成 21)
9	岡山県支部「岡山辟雍会」	2011.01.29 (平成 23)
10	鳥取県支部	2011.02.27 (平成 23)
11	静岡県支部	2011.03.26 (平成 23)
12	新潟県支部	2011.08.28 (平成 23)

番号	名称	設立年月日
13	広島県支部「広島辟雍会」	2011.10.30 (平成 23)
14	神奈川県支部	2011.11.26 (平成 23)
15	山梨県支部	2012.08.17 (平成 24)
16	鹿児島県支部	2012.10.07 (平成 24)
17	群馬県支部「群馬辟雍会」	2013.07.27 (平成 25)
18	近畿支部	2013.10.26 (平成 25)
19	佐賀県支部	2014.03.15 (平成 26)
20	栃木県支部	2014.06.15 (平成 26)
21	熊本県支部	2014.10.11 (平成 26)
22	大分県支部	2014.11.08 (平成 26)
23	埼玉県支部	2015.05.31 (平成 27)
24	宮崎県支部	2016.02.20 (平成 28)



## 栃木県

### 辟雍会栃木県支部活動状況(2017年度)

辟雍会栃木県支部では2017年度総会+懇親会を次のような形で行いました。

日時：2017年10月7日土曜

場所：チサンホテル宇都宮

内容：2016年度支部活動報告：栃の木3本を小金

井キャンパス内に記念植樹(2016.11.5)

2017年度支部活動計画：「いろは坂女子駅伝」(11月26日日曜) 日光神橋付近で、東京学芸大学チームを沿道応援。いろは坂女子駅伝応援に参加できる方はご連絡ください。

お願い：栃木県内在住学芸大卒業者、栃木県支部会員登録(無料)をお願いします！

Email: shogoka@ca3.so-net.ne.jp

辟雍会栃木県支部代表：

柏瀬省五 かしわせしょうご



栃の木記念樹 2017年8月現況

## 富山県

富山県の「獅子の会(辟雍会富山県支部)」は、昭和50年頃に、数名の仲間の不定期な集まりから始まったそうです。その後、平成2年に規約と名簿を作成して以来、27年間、毎年8月末の総会・懇親会が主な活動です。現在、県内在住の名簿搭載者は約300名となっています。

平成28年度も8月20日に総会・懇親会を開催しました。23名の参加者を得て、盛大に開催することができました。会は、事務局からの連絡の後、すぐに懇親会です。参加者は年代もばらばらですが、サークルが同じだったり下宿が近所だったり、不思議なもので、同じ年代を同じキャンパスで過ごしたということだけで、共通の話題が生まれ、旧知の間柄のように話が弾みます。大学の特性上、どうしても教員が多いのですが、この会では仕事の話は少なく、参加者全員が、あの日に戻れる貴重な場となっています。会の締めくくりは、いつも参加者全員が輪になって歌う「若草もゆる」です。学生時代にはほとんど歌う



「獅子の会」の旗のもと

ことがなかったこの歌を、この会に参加することで覚えたという方もたくさんおられます。

私たちは、これからもこの会の絆を大切にし、少しずつ仲間の輪を広げながら、末永く会を育てていきたいと思っています。

獅子の会(辟雍会富山県支部)  
事務局 草野 剛(平成2年国語科卒)

## 支部便り

### 埼玉県

#### 平成29年度 哲雍会埼玉県支部活動状況

埼玉県支部の昨年度の秋の研修会は、少人数ながら、富岡市の世界遺産部長の計らいでボランティアガイドの指導者の案内を受けて富岡製糸場を見学しました。その後の電動自転車での街中散策も含めて中身の濃い研修会をすることができました。

本年度の総会は哲雍会事務局のご厚意に甘えて、5月29日(土)に母校の20周年記念飯島会館に於いて開催しました。参加者は7名と昨年度と同様の状況でした。

総会時の協議で、会員の確保は哲雍会名簿の閲覧や口コミ・SNSの活用を。総会開催時期は、4月の第1・第2の土曜日か日曜日、あるいは8月下旬がベターか。魅力ある事業は卒業生の著名人の講演会・埼玉県の歴史探訪・文化遺産探訪・教育先進県の視察・趣味の世界の拡大。等々意見が出され、これらを基に事務局で検討することを確認しました。

第二部の講演会では「気象キャスターの平井信行氏(A類社会科・平成3年卒)」に「埼玉県のくらしと天気」と題して生活に密着した話を聞くことができました。クイズ10問の導入後、埼玉の天気の特徴や異常気象から身を守るためにやるべきことを学習しました。講演会の参加者は17人に増え、大好評でした。

今年度の会員数は65名と微増ですが、今後は、最大課題である会員の確保と総会・研修会への参加者増に向けて、魅力あるプラン(企画)を練り直したいと考えています。

埼玉県支部事務局長 阿部博之

### 千葉県

千葉県支部は、船橋市に在住または勤務する卒業生を中心とした団体です。

現在の会員は、船橋市が中心であるものの県内の教職員や学校管理職の方、県内で企業にお勤めの方、すでに退職され今でも教育に携わっている方など職種も年齢も様々になってきました。少しづつですが、会員の輪を広げ、市内から県内へと情報を伝達して会員数を増やそうと考えています。

昨年は、輪が広がり盛大に定期総会を開催しました。その後の懇親会では、会員の年齢差に関係なく、在学当時の思い出や卒業後から今日までの状況を交換しました。また、諸先輩からは、若手の会員の方々の悩みや将来に対するアドバイスもおこないました。大学卒業後は、それぞれが社会に独り立ちしていくわけですが、将来に対する希望なども上司に相談する前にアドバイスうけると言ったケースも出てきました。

今年も秋に船橋市内で定期総会を予定しています



ので、多くの皆様の参加をお待ちしています。県内には、私たち千葉支部とは別に高校の管理職を中心とした先生方の団体もあります。こちらの入会希望の方も、この機関誌「哲雍」第14号をご覧になった千葉支部へ入会希望の学生諸君も、入会希望の方は下記の連絡先でお願いします。

千葉県支部事務局長 石井康雄  
(現在 船橋市立金杉台小学校長)



## 青森県

今年の辟雍会青森県支部総会・懇親会は8月11日に青森市にて行われました。今回は辟雍会本部から馬渕貞利会長と山本一雄副会長、また学芸大学総務課基金事務室の高野和夫室長に遠路はるばるお越しいただき、青森支部の出席者12名と合わせた15名で開催されました。総会では馬渕会長より、本部の取り組み状況や全国各地に支部を設立する動きについてお話しいただきました。また高野室長より、基金等の支援事業を通じて大学との絆を更に深めて欲しいというお願いがありました。その後の懇親会は、山本副会長の元気な乾杯のかけ声でスタートしました。昭和45年卒から平成27年卒まで年齢差は40歳以上ですが、お互い東京学芸大学の同窓生としてわけ分け隔てなく酒を酌み交わし、とてもすてきな時間を過ごすことができました。会の最後には東京学芸大学学生歌「若草もゆる」のCDをかけながら全員で合唱し、大学時代の情景に思いをはせながら、次回の再会を誓ってお聞きとなりました。しかし、私が



平成29年8月11日(金)青森市にて

先輩から習い後輩に受け継いだ学生歌と、CDの学生歌は音程が違う部分があることに初めて気付きました。硬式野球部の仲間と肩を組んで歌った学生歌の方がいいよな、なんて作曲した方に失礼なことを思いながら家路につきました。

文：平成10年N類生涯スポーツ卒業  
辟雍会青森県支部 事務局長 里村輝

## 静岡県

8月19日(土)、東京学芸大学辟雍会馬渕貞利会長、丹伊田敏副会長をお招きし、平成29年度静岡辟雍会総会並びに講演会を開催しました。総会では、出席率をどう高めるかが話題となりました。馬渕会長からは辟雍会の奨学金事業や他県の状況についてお話をありました。

今年の講師は、平成17年L類生涯スポーツ科卒業の33歳、金澤大将氏にお願いしました。金澤氏は、31歳の若さで学校法人南陵学園菊川南陵高等学校の校長に就任された方です。東京学芸大学在学時には、ユニバーシアード日本代表に選ばれ、優勝の経験もあります。卒業後、横浜FCに入団、水戸ホーリーホック等のチームに移籍し、29歳で菊川南陵高校に就職しました。講演では、パワーポイントを使って、人生の苦楽を折れ線で描いた「人生グラフ」を示し、過去を振り返りながら、その節目で何を考え、どう行動してきたかを率直に語っていました。その中心にあったのは、サッカーです。体験に基づくこと



親睦会のようす

ばは重く、聴衆の心に響く講演でした。

静岡辟雍会の会員数は、現在、85名。およそ6割を現職の教員が占めています。4月にはフェイスブックを開設しました。11月には文学散歩を企画しています。若者をどう取り込んでいくかが今後の課題です。

文責 静岡辟雍会事務局長 勝田敏勝

# 支部便り

## 佐賀県

佐賀県支部の会員人数は、現在は14名(2017年8月現在)です。構成メンバーは、教育関係者が10名、マスコミ(テレビ局)4名になります。年齢層が若いというのも佐賀支部の特徴かもしれません。

県外に転勤されているマスコミの方々も、定例会に駆けつけてくださり、近況報告をマメに行なっております。

活動は年に数回支部会を開催し、それぞれの業界の話題に花咲かせながら、佐賀の地酒を飲み交わしています。

新しいメンバーもたくさん加わり、いろいろな業種が混ざった佐賀支部です。これからもいろいろな可能性に挑戦したいと思います。

事務局長 小松原修



## 神奈川県

### 1) 活動状況

神奈川支部では、毎年1回の総会を開催していますが、同時に会員の情報交換や研修を兼ねて和やかな場を設定し、その後懇親会も開催しています。話題となったものは、例えば①小学校現場での若い先生の悩みを聞く、②特別な支援が必要な生徒に対する対応例やその子の保護者とどのように接したかという実例の報告、③大学での研究の紹介などです。2017年11月25日には、「宇宙教育の考え方と簡単な実習」というテーマで、JAXAに勤める卒業生の松原理先生から、実習を含めてお話を伺うことになっています。

### 2) 今後に向けて

神奈川県内には多くの卒業生がいることが分かっているのですが、横浜市や川崎市、あるいは「獅子の会」といった、すでに以前から組織された方々との連携がまだうまく取れていないことが最大の課題かと思います。



幹事会神奈川支部 総会と研修 平成28年11月19日  
大学より、顧問の大竹美登利様、前本部役員鶴石賀昭  
先生も参加していただいた神奈川支部の会でした。

### 3) 教職だけではない進路

卒業生の多くは教職についていることと思われますが、教職ではない方々にも加わっていただき、多方面からの情報交換ができるようになるといいと考えています。さらに今は「子育て真っ最中」という方々にも子連れで集まれる会にしたいと考えています。

事務局 原 英喜



## 高知県

高知県内には60名程の学芸大出身者が在住し、年に1回程度懇親会を開催し親睦を深めております。今年3月14日(火)に元辟雍会会长 鷺山恭彦先生と奥様が「国立青少年教育振興機構国立室戸少年自然の家」を視察のため来高されました。その時に急ではありましたがささやかな懇親会を開催しました。

高知県に在住されている方で、この「支部だより」のスペースを読まれた方は、支部長の宮地か事務局の中山のメールアドレスまたは携帯電話まで連絡をいただきたいです。懇親会の案内をさせていただきますのでよろしくお願いします。和気あいあいとした和やかな会です。

支部長 宮地彌典(1973年度卒 D類保体科)

TEL : 090-5911-5088

メールアドレス : m-hirosuke@miyajigakuen.jp

副支部長 柚村 誠(1977年度卒 D類保体科)

宇賀孝篤(1988年度卒 A類保体科)

事務局 中山泰志(1990年度卒 D類数学科)

TEL : 090-4976-9220

メールアドレス : k\_kobun4769@docomo.ne.jp

## 北海道

辟雍会北海道支部の「第9回総会及び懇親会」が、平成29年8月5日(土)に札幌市中央区のネストホテル札幌駅前において開催されました。北海道在住の東学大同窓生相互の親睦を図るとともに、本道の教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的として平成21年8月に設立された当支部同窓会は、楽しく有意義な集いを積み重ね、今年ではや9回目を迎えました。年々同窓生の輪を広げ、現在は82名の会員で構成されています。

総会は、会長挨拶の後、全国代表者会議報告、会計・監査報告、支部規約の確認、新役員改選(役員全員が留任)、さらに次年度の開催日程(H30.8.4予定)等が了承されました。また、今年度は東学大総務部総務課長の山本学様(北海道えりも町出身)にも遠くご臨席賜り、学大の近況や「学芸夢プラン60」についてのお話を頂戴しました。

続く懇親会では、全参加者(14名)による近況報告や、母校の思い出話などでたいへん盛り上がりました!年に一度ながら毎年の同窓会は、母校の素晴らしさ・誇らしさや、同窓生相互の想いを分かち合える貴重な時間となっています。本道の広域性もあり、



十数名という参加者数の少なさが課題の一つですが、東学大にご縁のある方の講演会企画など、今後の充実発展に努めて参りたいと考えています。末筆ながら、辟雍会の益々の発展と会員の皆さまのご健勝をご祈念申し上げ、今年度の北海道支部報告とさせていただきます。

北海道支部会長 鶴丸泰生(S38年卒)

## 支部便り

### 鳥取県

本県では平成元年に「東京学芸大学鳥取県同窓会」を立ち上げ、平成23年からは辟雍会鳥取県支部として活動しています。年1回、東部地区、中部地区、西部地区の3地区の持ち回りで情報交換会と称して懇親会を開いています。開催時期や内容は各地区の世話人を中心にそれぞれの地区が企画し運営することになっていて、昨年度の第28回は、2月25日(土)、中部地区のJR倉吉駅前の居酒屋で「情報交換会」を開きました。全県から20人ほどの参加でしたが、いつもどおりお酒がすすむとともに話にも花が咲き、楽しく有意義なひとときとなりました。また、参加者の中に、初参加の若い方があり、毎年少しずつ会が広がっていることもうれしく思いました。先輩に誘われて来たとのことであり、同窓生同士で地道な声かけをしてもらっていることに感謝です。現在、200人ほどの同窓生がありますが、今後もこうして若い人が参加してくれるよう働きかけていきたいと思います。



辟雍会原稿2017鳥取県

今年度、29回は東部地区の予定です。そしてその次は30回の節目。これまで節目の年には講演会や研修会を開いてきました。栗山英樹さん(皆さん御存知の現プロ野球北海道日本ハムファイターズ監督)にお出でいただいたこともあります。さて、30周年はどうするか、今から楽しみでもあり、悩みの種もあります。

事務局長 武田基資

### 大分県

「シンプロでお馴染み」おんせん県おおいたは温かい心で繋がります。

平成26年11月8日に辟雍会大分県支部(大分辟雍会)が設立されてから今年で4年目を迎えることとなりました。第3回総会を本年、1月21日に大分市内において開催したところ、昨年を上回る17名の同窓生が集い、各自の思い出を語り合い、交流を深めることができました。辟雍会本部からも昨年に引き続き、2名のご来賓として、学長の出口利定先生と会長の馬渕貞利先生をお迎えし、大学の現状や近況についてのお話や本支部の活動へのねぎらいのお言葉をいただきました。

参加した会員の方々は、再会の様子を振り返ったり、会員相互の近況を報告し合ったりすることで、親睦を深めることができました。

本年度、参加された会員さん方の中には20代の若い方が4名も参加され、同じ学科の同級生であったり、同じ高校の卒業生であったりと懐かしい大学時代のエピソードから郷土の話題へと花開きました。短い



時間ではありましたが、会員の皆さんと楽しいひと時を過ごすことができました。また、卒業して数年の若い会員の皆様も多数参加していただくことで、年代を越えた大学の様子を知る機会となりました。会員数も年々増加傾向にあり、今年は、現役の大学生にも参加の声をかける予定にしています。

他支部の皆様も、是非「シンプロ おんせん県おおいたの魅力」を発見してみませんか。

辟雍会大分県支部会長 濑口卓士  
(昭和63年卒 A類社会選修)



## 東京学芸大学辟雍会支部連絡先一覧(2017年6月現在)

【これまでに設立された辟雍会の道県支部では、皆さんからの連絡を待っています】

### ●北海道支部 連絡先 中村雅之

TEL:090-2874-2945 E-mail:m-nakamura1125@outlook.jp  
「カムバッケ・サーモン! 北の大地(北海道)は、皆さんの凱旋を待つてまーす。」

### ●岩手県支部 連絡先 松尾和彦

TEL:019-692-3249(勤) E-mail:ptf60-k-matsuo@iwate-ed.jp  
「故郷岩手での皆様のご活躍に期待しています。バスケットボールで岩手を元気にしよう。」

### ●群馬県支部 連絡先 須永 智

TEL:090-7849-1059 E-mail:sunaga-sat@staff.gsn.ed.jp  
「お互い、情報交換をして、日々の活動に役立てましょう。夏に懇親会を予定しています。」

### ●千葉県支部 連絡先 石井 康雄

TEL:047-438-9380 E-mail:ishaso.fuki@gmail.com  
「千葉県在住の同窓生は、ぜひとも千葉県支部へ加入してください。若い力が必要です。」

### ●山梨県支部 連絡先 河野みな子

TEL:090-4731-5660 E-mail:nbhp997@ybb.ne.jp  
「仲間と語り合えるのは最高です。是非ご連絡を!」

### ●富山県支部「獅子の会」 連絡先:立山町立高野小学校 草野 剛

TEL:076-463-0427 E-mail:kusano-tsuyoshi@tym.ed.jp  
「富山では280人以上の方ががんばっとるよ。富山に戻るときには連絡しられ。まつとっちゃん。」

### ●静岡県支部 連絡先 勝田敏勝

TEL:090-7046-6228 E-mail:katsuta-t@vc.tnc.ne.jp  
「世代を超えて、かつてを思い、明日を語り、今を生きる、富士山のような会です。」

### ●鳥取県支部 連絡先 武田基資

TEL:0858-22-2037 E-mail:takeda\_mt@mail.korikyo.ed.jp  
「20数年、充実した水魚の交わりをもっています。鳥取に来られたら是非ご連絡を!」

### ●岡山県支部 連絡先 幸相裕一

TEL:090-3746-8807 E-mail:hy-tkn@mx1.tamatele.ne.jp  
「ざくばらんな会です。岡山に帰ったら、気軽にご連絡ください。」

### ●高知県支部 連絡先 中山泰志

TEL:090-4976-9220 E-mail:k-kobun@titan.ocn.ne.jp  
「高知県出身の方はもちろん、県外の方、暖かい高知県の教員になってください。連絡をおまちしています。」

### ●熊本県支部 連絡先 藤田まり子

TEL:096-357-9417(熊本市立力合小学校)  
E-mail:fujita.marikoB@city.kumamoto.lg.jp  
「阿蘇に負けんパワーと、天草の海のごとて綺麗な心で、熊本の学校を元気にすたためにがんばっとるばい!」

### ●宮崎県支部 連絡先 清武小学校:村中田 博

TEL:090-8831-8076 E-mail:hm110629@gmail.com  
「みんな誰かとつながっちゃって、てっげなおもしりっちゃがー。ひったまがるわ。連絡しないよー。待っちょるよー!」

### ●青森県支部 連絡先 里村 輝

TEL:090-8781-7482 E-mail:satomura-akira@m05.asn.ed.jp  
「学芸大青森キャンパスでは、同窓生が楽しく友好を深めています。夢の続きを青森で。まずは連絡ください。」

### ●栃木県支部 連絡先 柏瀬省五

TEL:0284-62-6229 E-mail:shogoka@ca3.so-net.ne.jp  
「栃木の教育・文化・スポーツを支援する東学大同窓生の楽しい懇親会です。」

### ●埼玉県支部 連絡先 阿部博之

TEL:048-862-6857 E-mail:h-abeb618@xa2.so-net.ne.jp  
「本音で語り合える同窓生のネットワークは強い味方です。是非ご連絡を!」

### ●神奈川県支部 連絡先 原 英喜

TEL:090-9800-5831 E-mail:hharra@kokugakuin.ac.jp  
「世界に夢を!そして、国内でも夢を!苦労を語れる仲間、同窓生のいることを忘れない。」

### ●新潟県支部 連絡先 木澤英二

TEL:090-3758-6994 E-mail:7131kizawa@gmail.com  
「若けいあねさん、あにさん、越後に掲げし獅子の星座の旗のもとで、おめさんがたをまつてて!」

### ●石川県支部 連絡先 新村 裕二

TEL:090-5689-5618 E-mail:nuka-e@kanazawa-city.ed.jp  
「ふるさとは、あなたの帰りを待つよ。新幹線かがやき号で帰ってきまし!」

### ●近畿支部 連絡先 木野康裕

TEL:06-6488-0202(相生学院高等学校) E-mail:kino@aigaku.gr.jp  
「楽しく勉強にもなる近畿支部会。『よーし、明日から、また頑張るで!』のエネルギーを持って帰って頂ければ嬉しい限りです。いつでもご連絡ください。」

### ●島根県支部 連絡先 玉林尚之

E-mail:tamarin511@sky.megaegg.ne.jp  
「まめでおっちゃんさい。若い力まっちょーけん!」

### ●広島県支部 連絡先 田中信也

TEL:090-4806-7177 E-mail:s\_tanaka@hiroshimaymca.org  
「同窓の集りは本当に味わい深いものです。広島に来られたら是非ご連絡ください。」

### ●佐賀県支部 連絡先 小松原 修

TEL:090-1089-8832 E-mail:samukomatsubara@yahoo.co.jp  
「教育に携わる卒業生とマスコミに携わる卒業生でがばい調和がとれます。バルーンに乗って同窓会してます!」

### ●大分県支部 連絡先 渡口卓士

TEL:090-9070-2962 E-mail:seguchi-takaji@oen.ed.jp  
「日本一のおんせん県おおいたで楽しかった大学生活と一緒に語ろうや。連絡まっちょんけん。」

### ●鹿児島県支部 連絡先 雲井末歎 TEL:099-285-7766

「鹿児島では、桜島が毎日噴煙を上げています。その力強い始動は鹿児島の全ての同窓に届いているはずです。支部の和も同じように広がってほしいと願っています。」

◎「新しく支部を設立したいとお考えの方、その他お問い合わせは<東京学芸大学辟雍会事務所>へお願いします。

# 1



## 螢窓と同窓

前多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校校長  
辟雍会副会長 丹伊田 敏

戦火荒廃の跡の残る時に小中学校を過ごし、にわか作りの校舎で高校を過ごした。そして教師を目指して学芸大の理科に入学したのは昭和36年だった。兵舎を改造した教室、未舗装の道と雑草だらけ構内の小金井校舎であった。大学本部は世田谷校舎、現在の附属高校にあった。

教師になり何度卒業生を送り出したことか、都立校、付属高と勤め上げさらに私立中高校で、その間英国での研究、インドネシアでの教育改善援助、研究会・学会活動と経験をしてきた。今となれば全て思い出であるが、単にそれだけではない。始めがあれば終わりがあると言われるが、教育という観点では、学校を卒業しても終わりではなく次のステップである事には違いない。「同窓」という思い出のような縊というようなものも残っている。同窓に関して右のようなものを書いたことを思い出した。これは多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校の学期ごとに発行する生徒、保護者向けの学校報で、毎回校長の所見を述べているものである。

この文章のように、同窓会や親睦会は見える利益を求めるものではなく、個人の考え方による「心の肥やし」であるかも知れない。

1965(昭和40)年3月卒業 乙類理科

随想

## 螢窓と同窓

校長  
丹伊田 敏

昨年の文化祭に同窓会のコチラができた。学校がでまく「20年が経ち本格的な同窓会組織を作ろう」という機運が高まつたからである。

同じ学校の卒業生を「同窓」と言っているなぜ同じ窓と書くのだろか。卒業式で歌われる歌にヒントがある。「螢の光 窓の雪」書城む月日、重ねつつ」とあるが、「同窓」とは、同じ窓からさしかむ螢の光や雪明りで勉強した仲間という意味で、同じ教室で学んでいた／いることで、その原典は古代中国の晋の時代、車胤と孫康は、貧しいために灯りで勉強したといふ苦労話を集めてその光で書を読み、冬は雪の明かりで勉強したといふ苦労話が基になっている。「螢雪」「螢窓」「同窓」などと書く言葉も、ここからである。今と昔と違うのは苦労の程度である。静書では同じ学校または同じ師について学ぶこと、とある。同じ学校で学んだ仲間であるから同窓生であるは当然だが、同じ師から部分は先生が数年で転勤したり辞めたりすると該当しなくなるが、幸いにもありがたくも本校は多く

の先生が長い間に教育に力を注いでくれている。私の経験も同じ学校に三十三年間という長い間勤めていたので、そこが自分の学校であります。それ以上に愛着を持つてゐる。ある大学の同窓会は卒業した人、短期に留学した人も、また教授陣や事務系職員もその大学、大学院出身者であろうが無からうが、学ぶために、勤務として何らかの形で籍を置いた者すべての人を対象としている同窓会の大学もある。

私にも小・中・高・大学をはじめ研究室など自分の同窓会のほかに教え子のそれが沢山ある。先日、高校を四八年前に卒業した同期生の同窓会があつた。数年ぶりの旧友に会つた。お詫びやそれぞれの生き様の話、年老いてしまった担任も来ていただき盛り上がつたのである。何がそうさせるのか、たつた三年間なのに同窓会の集まりにいくと盛り上がる。

同窓会の集まりはなぜ楽しいか。

進路が違うからか、人生が違うからか、なつかしさからか、確かに同窓会の集まりを嫌う者は参加してないからかも知れないが、ともかく旧友と会うとうれしくなる。同窓会の集まりの楽しさは在学時代の思い出だけではないはずだ。昔も今も学校をこよなく愛する気持ちが、先生から得た恩が、それとも時を経ても母校が雄として存在しているからかも知れない。



韓国ソウル昌徳宮にて(2017)  
インドネシアからの観光客とともに

# 2



## 学芸大学と私の学芸員人生

江戸東京博物館学芸員 市川寛明

1984年4月、私は東京学芸大学に入学しました。普段は学芸員として働きながら、担当した展覧会の実施年すら忘れてしまう事も屡々なのですが、大学入学当時の事は鮮明に覚えています。覚えているというよりも忘れられないといった方がよいかもしれません。といいますのも高校卒業後、単身上京して、新聞配達しながらの苦しい浪人生活を送った私には、ようやく「婆娑」に出てこられたような解放感があったからです。

大学に入ると、とにかく自分の好きなことを見付け、それに打ち込んで将来の職業につなげるという浪人時代に心に刻んだ方針に基づき、歴史研究サークル総合史学研究会に入り、歴史学教室の竹内誠先生のゼミの門をたたき、使命感にも似た高揚感をもって近世日本社会の研究にのめり込んでいきました。

幸いにして当時の歴史学教室は、近世史の竹内誠先生、古代史の木村茂光先生、中世史の佐藤和彦先生、現代史の君島和彦先生といった先生方が揃い、侃々諤々と議論を尽くす自由闊達な雰囲気が横溢し、西洋史、東洋史の先生方との交流も盛んで、教室全体が醸し出す一体感は今でも懐かしく思い出されます。

1991年3月に東京学芸大学の大学院修士課程を修了した私は、一橋大学大学院博士課程に進学し、1993年7月に現職となる江戸東京博物館に就職しました。しかし、その後も学芸大学歴史学教室の先生方との関係は途切れることはありませんでした。何しろ学生時代の指導教官であった竹内誠先生が、就職後4年目に江戸東京博物館の館長へ着任され、以後18年間にわたって上司として仕えることになったからです。竹内先生と学生時代よりも濃厚に接することになるとは夢にも思いませんでした。また君島先生・木村先生や社会科教育の坂井俊樹先生、ゼミの

先輩でその後学芸大学に赴任された大石学先生たちが推進された歴史の日韓共通教材を作成するプロジェクトにも参加させていただきました。

江戸東京博物館に就職して四半世紀に近い年月が経過しましたが、その学芸員人生の前半は展覧会の時代です。これまで担当してきた展覧会のうち、江戸時代のものだけを列記してみると次のようになります。「葛飾北斎」(1995)、「参勤交代」(1997)、「大江戸八百八町」・「徳川将軍家」(2003)、「新撰組!」・「徳川将軍家と鷹狩り」(2004)、「江戸の学び」(2006)、「龍馬伝」(2010)、「花開く江戸の園芸」(2013)。「あの展覧会を担当していたのか…」と思い出していただけれど幸いです。学芸員人生後半は、調査研究・国際交流事業の時代です。国際交流事業の中心にソウル歴史博物館との交流事業がありますが、これは学芸大学の先生方とともに携わった歴史の共通教材作成のプロジェクトが契機となり、現在に続く博物館の交流事業に発展したもので。また学部時代、博物館学の伊藤寿朗先生から直接教えを受けることができたことは、学芸員として仕事をするうえで大きな心の支えとなりました。

「あの頃の未来に僕らは立っているのかな」——名曲「夜空ノムコウ」の歌詞そのままに、懸命に過ごした学芸大学時代がその後の学芸員人生に大きな影響を及ぼしたのだということを、この原稿を書きながら改めて痛感しています。ともに学んだ友人達、今も公私にわたってご交誼くださっている多くの先生方にあらためて感謝する次第です。

1988(昭和63)年3月卒業 A類社会選修

1991(平成3)年3月修了 大学院修士課程  
(社会科教育)



江戸東京博物館の全景 JR両国駅より徒歩5分、都営大江戸線両国駅からは徒歩1分。ご来館をお待ちしております。



東京大学の佐藤健二先生等をお招きして開催したシンポジウム「浅草地域のあゆみII」(2017年8月)の模様。



# 3



## 恩師によって広がるつながり

品川区立八潮学園校長 山口晃弘

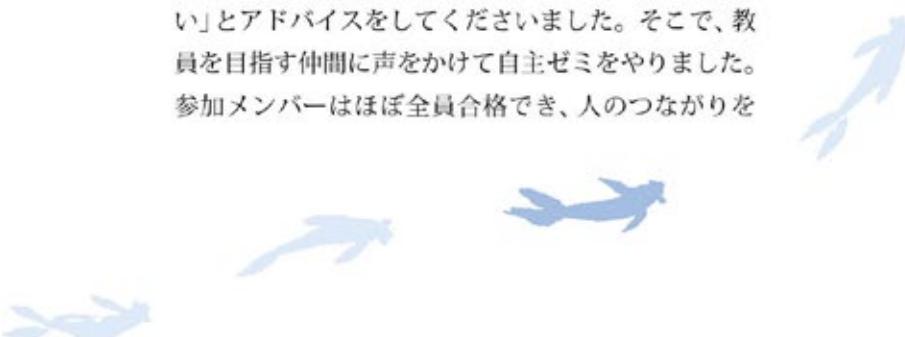
### ○はじめに

私は昭和59年3月に東京学芸大学を卒業し、35年が経とうとしています。私の卒論を指導してくださったのは遠藤節子教授で、私の第一の恩師です。学生時代を振り返ると「教育は人なり」という言葉そのものだと感じます。

### ○好きな理科を仕事に生かす

私は初等教育教員養成課程理科教育選修でした。理科が好きだから教師になりたいという漠然とした理由で学芸大学に入学しました。3年時に特に好きだった化学の研究室に配属が決まりました。その担当が遠藤先生でした。評判通りの穏やかで優しい恩師です。あまり研究室には来ない学生にも、私のようにいつも研究室にいる学生にも、同じように親身になって接してくださいました。

当時はバブル期だったせいか、教員養成が看板の学芸大でも、メガバンクや電機メーカーなどの採用が当たり前のようにありました。4年になるかならないかの時期に内定が出ている同級生もいました。むしろ、教員採用試験の方が門戸が狭かったのです。迷っている私に「あなたは中学を受験して理科をやりなさい」と遠藤先生が背中を押して下さいました。ちょうど同窓の現職の校長先生をお招きした講演会を大学が企画していました。このときも、遠藤先生が「私も行くのでいっしょに聞きに行きましょう」と誘ってくださいました。教師になりたい、という意欲は高まりましたが、一方で、全く採用試験の対策をしていなかったので、このままでは受からないという不安も同じぐらい高まりました。やはり、遠藤先生が「学生同士で集まって、試験対策の勉強をしなさい」とアドバイスをしてくださいました。そこで、教員を目指す仲間に声をかけて自主ゼミをやりました。参加メンバーはほぼ全員合格でき、人のつながりを



感じました。

#### ○都の研修制度を生かす

2校目のときに、都の教員研究生に応募しました。このときも遠藤先生が「理科教育の勉強をした方がいい」と背中を押してくださいました。都立教育研究所の地下1階の化学研究室での生活はまさに研究三昧でした。生活は楽しかったのですが、研究は厳しく1枚の書類の書き直しが数回に及ぶのは当たり前でした。

しかし、そこから人のつながりが広がっていくのです。東京都教育委員会、東京都中学校理科教育研究会の仕事をするようになりました。文科省、日本化学会、理科教育学会、教科書など様々な場面での仕事が舞い込むようになりました。学習指導要領の改訂では、平成20年と29年の2回、文科省の側から関わって仕事をしました。最近は、少なくとも年に1冊は、理科教育に関する著作を刊行しています。単著もありますが、グループで作る書籍がほとんどで、やはりそこでも人のつながりが大切になりました。

#### ○教育改革に身を投じる

3校目は今の品川区に異動しました。教育改革を施策としている区の「小中一貫教育の推進」の看板になるような学校でした。といっても、最初は反対の声が圧倒的でした。保護者や地域からも「今の学校をなくさないでほしい」という声ばかり。教員間にも対立がありました。その中で、現実に巻き起こる課題に体当たりで向き合う日々でした。自校昇任をしたこともあり、同じ学校に結局12年間もお世話になりました。最後の数年は「小中一貫校でよかった」といって卒立つ卒業生を見送りました。中には今でもつながっていたり、教員になった卒業生もいたりします。

#### ○おわりに

現在は品川区立八潮学園という義務教育学校の校長をしています。1から9年(中3)まで学級数27



卒業式(昭和59年3月 遠藤研究室)



遠藤研の研究室旅行 伊豆下田・白浜海岸にて(昭和58年8月)

学級、在籍している児童・生徒数は800名超、フルタイムの教職員だけで50名の大規模校です。活気に満ちた学校で、毎日楽しく仕事をさせていただいています。

夏休みのある夜、昔の研究室の仲間数名で集いました。久々にお会いする皆さんは、相応に年齢を重ねた顔になって、それぞれの職場で仕事を全うしようとしています。活躍している様子を伺うと、自分の励みになります。もちろん恩師の遠藤先生もおいでになりました。「忙しいんでしょ? 元気にやっていますか?」と私たちの生活を気遣ってくださいます。これは研究室で面倒をみていただいたときと変わりません。かけがえのない人のつながりの原点がそこにあるような気がしました。

昭和59年3月 A類理科教育選修卒業

# 4



## 書道科同窓会「硯心会」と 学芸書道全国展

東京学芸大学准教授(美術・書道講座) 石井 健

東京学芸大学における書道教員の養成は、1952年4月の特別教科(書道)教員養成課程の設置を機に本格化し、以後、幾度かの教育組織の再編を経て、現在は、中等教育教員養成課程(B類)書道専攻として、高等学校芸術科書道の教員養成に取り組んでいます。

硯心会(けんしんかい)は、学部書道専攻の卒業生、専攻科・大学院の修了生からなる同窓会組織で、1953年の学部卒業生を第1期生とし、以後、1800名におよぶ卒業生・修了生を輩出しています。

この硯心会が主催する二大行事が、毎年7月に銀座の洋協アートホールで開催される硯心会書展と、大学の芸術館で開催される学芸書道全国展です。

このうち、学芸書道全国展は、東京学芸大学を卒業し、書道の教員となった卒業生が、日頃の教育実践の成果を発表するとともに、指導法の反省・改善に資することを目的として開催した教育書道展がその前身で、第1回の教育書道展は、1967年1月、当時の東亜商業高等学校を会場に開催され、小・中・高校生の作品8000点が展示されました。その後、会場の変更や中断をはさみながらも、硯心会役員・会員、出品団体の指導者の皆様のご尽力により、学芸書道全国展として、41回を重ねるに至りました。

展覧会の主催者についても、発足当初は本学書道専攻の同窓会である硯心会のみでしたが、東京学芸大学の名を冠し、大学の施設を利用して開催しているところから、現在は、本学書道分野も主催者に加わっています。

近年、書道学科や書道コースを擁する大学主催の書道展が増えてきていますが、学芸書道全国展は、教員養成大学である本学書道専攻の同窓会と本学書道分野が開催する児童・生徒を対象とした書道展覧会であるところから、開催の趣旨も、学習指導要領に示された目標および内容を尊重し、児童・生徒の書写能

力および書の表現力を育成することを目的としているところに特色があります。また、上位賞に入賞した各作品は、仮巻表装と裏打ちをほどこした上で展示されるため、返却後は、各学校の文化祭などでそのまま展示することができ、多くの出品団体から好評をいただいています。

本年度、第41回展は、7月21日(金)／作品送付締切、7月29日(土)／作品審査、8月23日(木)／入賞作品の陳列、8月24日(金)・25日(土)／展覧会、25日(土)／表彰式、26日(月)／作品返送作業、の日程で開催されました。出品作品の受付・集約にあたっては、芸術・スポーツ科学系事務室の皆様にたいへんお世話になり、また、作品審査、展示、表彰式では教室や芸術館など、大学の施設を利用させていただい

ております。

本年度は、全国18都道府県、122団体から8215点の作品が出品されました。審査は書道分野の教員を審査顧問とし、書道分野教員2名、硯心会役員・会員約20名により、厳正かつ公正におこなわれ、審査員全員による投票の結果、最高賞である東京学芸大学学長賞10点以下、硯心会会长賞11点、東京新聞賞3点、全日本書写書道教育研究会賞17点、硯心会理事長賞77点、最優秀団体賞2団体ほかの各賞が決定しました。8月25日(土)に開催された表彰式では、出口利定学長より、ご祝辞と学長賞の授与をいただき、受賞者、ご家族、指導者の方々もたいへんよろこんでおられました。

このような大規模な展覧会が開催できるのも、大



学芸書道全国表彰会

学のご理解・ご協力と、硯心会の皆様のご協力、企画・運営を担ってくださっている硯心会学芸書道全国展部の皆様のご尽力、作品の整理、審査補助、陳列、作品返却といった労の多い作業を支えてくれている書道専攻の学生の皆さんのが助力があってこそといえます。心より御礼を申し述べ、稿を閉じます。

1992(平成4)年卒業 D類書道専攻  
1994(平成6)年修了 大学院修士課程美術教育(書道)

# 5



## 「きっかけ」をつくる仕事

国立科学博物館附属自然教育園非常勤事務職員  
(ボランティア担当) 丸山瑛奈

「こんな川に生き物なんているわけがないじゃないですか。」大学院生の私が、ある高校の生徒を対象に、河川の環境教育に関わる研究をしていた時のことです。学校脇にある河川を長年調査してきた理科部の生徒たちは、調査対象である河川を橋の上からしか見たことがなく、調査も橋の上からバケツを投げ込み、水を回収し、水質調査をするというものでした。前述した台詞は、そんな彼らが対象河川にいる生き物調査をすることになった時に発したものです。確かにその河川はかつて、大変汚れていることで有名な川でした。しかし、河川のほんの一部しか見ていない生徒たちが、どうして「生き物なんているわけがない」と決め付けてしまうのか、少々残念な気持ちとともに、「彼らに河川の見方が変わるきっかけを与えたい」という野心にも似た気持ちが湧いてきました。

生き物が特に多くいそうな箇所に彼らと副長を着用して近づき、トラップを仕掛けてみると、ムギツク、タモロコ、ヌマエビ等様々な種類の生き物を捕まえることが出来ました。トラップを引き上げた瞬間の、愛おしそうに生き物を観る彼らの目を私はずっと忘



れないと思います。

この「見方が変わるきっかけを与えた」という気持ちちは、今の仕事でも同じです。私は現在、国立科学博物館で仕事をしており、昨年度までは学芸員課程の一環である博物館実習を担当していました。科博の博物館実習では実習生に、実際に来館者と接する機会を設けています。例えば「パンダ」という生き物を多くの方は知っていると思いますが、「パンダの顔は他のクマと違い、どうして丸いのか?」「どうして

ばならないと思います。しかし、実際に実習が始まると、「上手く説明できない」と実習生から言わることがよくありました。「上手く説明できない」というのは、こちらが主役になってしまっているように思いました。そんな時は、私自身も実習生に対し、博物館における教育の見方が変わるためのきっかけを伝えるよう試みました。ただ、分かりにくいヒントで却って実習生を混乱させてしまったこともしばしばだったかと思います…。それでも、実習の終盤に

なると、多くの実習生が一方的に情報を渡すではなく、来館者とコミュニケーションを図りながら考える「きっかけ」を与えられるよう試みている姿を目にして、嬉しい気持ちになりました。

周囲に「きっかけ」を与えていた私ですが、本当は周囲の方々から「きっかけ」を与えられることの方が多いのです。前述した高校生、実習生はもちろん、学生の頃の友人、先生をはじめ、お世話になった方々



白黒なのか?」について知っている方は少ないと思います。普段聞いた事のある生き物や、多くの事柄について、そのある一部を見て「知ったつもり」になっている場面は多くあるように思います。そこで、実習生には展示に関連する標本やレプリカを用いて、展示室内で来館者に展示の見所を伝えることで、「博物館と来館者の架け橋になる」といった博物館の使命の一つを考えてもらいたいと思っていました。博物館における教育は「教える」こととは異なります。私たち伝える側は主役ではありません。飽くまで主役は来館者であり、私たちは来館者が自ら考えるためのきっかけを与える、いわば補佐的な存在でなけれ

全員から、私は色々な「きっかけ」を頂いたと思います。だからこそ、そうした方々への感謝も込めて、これからも多くの方に「きっかけ」を与えられる仕事をしていきたいと思います。現在は、科博の附属施設である自然教育園で、ボランティア制度に関わる仕事をしています。これからは、ボランティアの皆さんと協力しながら、来園者の方々に生き物や自然を考える「きっかけ」を与えられる場を創っていきたいと思っています。

2012(平成24)年3月修了 大学院修士課程環境教育

# 6



沖山光

教員養成カリキュラム産みの親・  
沖山光(文部省初代筆頭教科調査官国語科)

帝京大学小学校管理指導主事、講師 太田由紀夫

### 1 青山師範附属小学校高等科に学ぶ

沖山光は、明治38(1905)年5月28日、八丈島大賀郷において、父沖山順作、母みつとの間に一人息子として生まれた。父も母も八丈島出身である。父は旧姓を「喜田」といい、八丈島に流された宇喜多秀家の流れをくむ家系である。

大正5年一人息子の光に十分な教育を受けさせようと一家で東京に移り住み、光は、東京府多摩郡渋谷町の臨川尋常小学校の5学年に転入学した。臨川尋常小学校を卒業した光は、当時難関であった青山師範学校附属小学校高等科に合格し、大正8(1919)年に15歳で卒業している。

### 2 青山師範学校への入学と国語教育への思い

附属小学校高等科を卒業した光は、青山師範学校への入学を目指し、青山師範学校予備科に入学、一年後に修了した。そして、大正11(1921)年4月16歳で青山師範学校本科第一部に進学した。

卒業を間近に控えた4年生のときに、「創作ノート」という題名で卒論のようなものを指導教官に提出している。その中に綴られている(国語教育への思い)を紹介する。

私が食事以上に愛好するものは何か、私の生涯を挙げても尚、続けんとするものは何か、国語教育、私の全生命打ち込むものは、これです。どんなに疲労しても国語の著書だけは読む。極言すれば、国語教育を離れて私の生活はない。

と思ひのたけをノートにぶつけている。

### 3 青山師範附属小学校の訓導となる

沖山光は、大正14年3月東京府青山師範学校を卒業し、その年の4月に東京市櫻川尋常小学校に赴任し

た。その後、昭和3年4月に、青山師範附属小学校に訓導として異動した。

青山師範附属小学校での沖山は、常に最先端の内外の学問（言語学、古典、哲学など）を最新刊の著書から学び、研究していた。その目的は、あくまで子ども達が自分の力で文章を読み取ることができるようになるための指導の工夫とその支えとなる理論の探究であった。この過程で国語教育学者の垣内松三、さらに沖山の生涯の師となる言語学者の小林英夫博士など多くの碩学に出会いて研鑽を積んでいった。

東京府青山師範学校は、昭和11（1936）年世田谷の下馬に移転する。この年の11月25日、沖山は「低学年における総合的取り扱いの研究」という新構想の教科カリキュラム研究をまとめている。この研究著作は、大正自由主義運動の影響を受けた教育思想である「児童中心主義」の影響を受けた最先端の教育活動の集大成である。新校舎に移転した青山師範附属小学校は常に、新しい教育の先頭に立つ意気込みを示す場所だった。しかし、昭和16（1941）年太平洋戦争が勃発し、その影響が教育にも出てきていた。昭和18（1943）年、師範教育令が改正され、青山師範学校は国立に移管し、府立女子師範学校と統合して官立の「東京第一師範学校」となり、附属小学校は東京第一師範附属国民学校となった。

戦局が悪化し、長野県浅間温泉で疎開学園を実施していた沖山は、担任していた6年生を卒業させるために、昭和20（1945）年の初めに東京に帰った。

#### 4 教員養成カリキュラムの研究と東京学芸大学

東京第一師範附属国民学校は、終戦の翌昭和21年9月17日に始業式を実施したという記録がある。当時、沖山は教育実習生指導部主幹を務めていた。これが国民学校としての最後の儀式となってしまう。

その年の10月にCHQ（連合国軍最高司令官総司令部）のCIE（民間情報教育局）教育刷新委員会から「師範学校を大学にする。そのための委員を委嘱する。」という突然の呼び出しがあった。

その時のことを沖山は、ある研究会の座談で、

進駐軍から呼び出されましてね、そして、現在専門学校である師範学校を、これを大学にするんだと、大学にするためのカリキュラムを作るから、そのことのためにいろいろ訊ねたいことがあるから、出てこいということで、学生の教育の面については五十嵐が担当しろ、実習の責任者は、おまえがやっているので、実習に関するいろいろな問題は、沖山がやれといった具合でした。

結局、委員会といったって、結局二人なんですよ、指名されているのは、後は文部省の教員養成課の課長とか、局長とか、そういう人たちは、いっさい、発言を許さんという厳命なんです。口を開くのは、五十嵐さんと私だけでよい、ということなんです。



文部省にて

と語っている。

これは、沖山が教育実習生指導部主幹という立場で東京第一師範学校の「教員養成カリキュラム」研究の中心となっていたからであろう。当時CIE教育刷新委員会委員となっていた東京第一師範学校最後の校長木下一雄は「師範教育を刷新して全く新しい特別な教育の構築をこそ考えるべきである。」と主張していたが、その強力な根拠となったのがこの「教員養成カリキュラム」である。これが基になり、「大学に於ける教育学科のカリキュラム—東京第一師範学校案一」としてまとめられ、東京学芸大学の教員養成課程の土台となったのである。

沖山光は、前述の研究会の座談で、

自分の奉職した学校への恩返しを、終戦の時にできたのかなと思っております。

と述べている。

1974（昭和49）年3月卒業 A類理科選修



## ヤギの賜物

東京学芸大学F類環境教育専攻4年 花岡凌太

真夏の太陽が肌を焼き、湿度を伴った気だるい熱気が行く手を阻む中、正門から大学構内に入り、ひたすら北西を目指していくと教材植物園（農園）の入口が見えてきます。園内に入り、美しく手入れされた芝生広場を西へ、環境教育研究センターを横切って突き当たりまで行けば、モスグリーンのフェンスと伝統工法でこしらえた土壁の小屋、そして白い毛皮を纏ったヤギが出迎えてくれます。





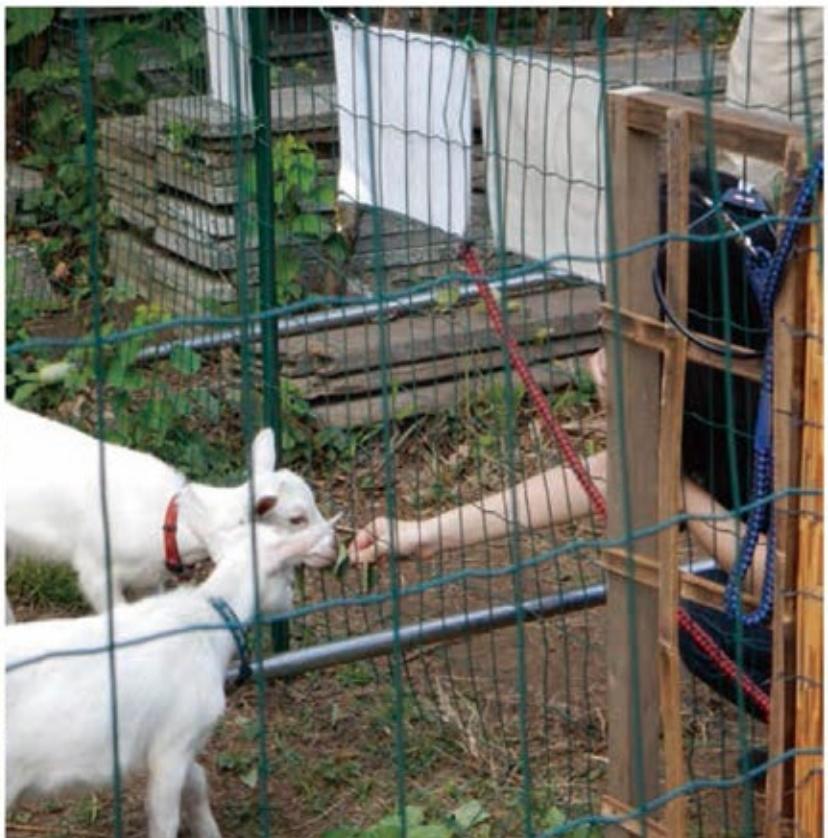
「ヤギ除草」という言葉を聞いたことのある方は多いと思います。通常機械や薬剤によって行われる除草作業をヤギにさせることで、環境に優しい雑草防除法として近年注目を集めています。私はそのような都市域での動物による草地管理の研究をしたいと思い、指導教員である小柳先生をはじめ多くの方々にご協力いただき、今年の6月に東京農工大学からヤギをお借りすることができました。

やってきたのは母ヤギと双子の娘(当時生後2週間)の計3頭。動物の飼育経験がほとんど無いため、飼育方法や放牧方法といったあらゆる情報を、本やネットなどから集めては試行錯誤する毎日でした。生き物が相手なので思い通りいかないことが大半ですが、その度に「本物」だからこそ気づき、学べることがたくさんあると実感します。

また、ヤギの飼育を通じて僕の世界は大きく広がりました。日々の世話や放牧実験の中でヤギを見に

訪れる子どもたちやその保護者の方、大学職員や学生、散歩中の地域の方など学内外を問わずたくさんの人と交流する機会が生まれました。中には世話をしたいと希望してくれる子もあり、その子と一緒に活動したり、逆にその子の保護者のコミュニティの行事に参加させていただいたりと、ヤギが持つ人を繋げる力やコミュニティ活性化の力の一端を体験することができました。

この数か月を通じて僕はヤギからたくさんの貴重な経験を貰い、ヤギとともに成長することができました。ここまで書いてみたのですが、残念ながらこれを読みいただく頃には、ヤギたちは実験を終えて元の場所へ帰ってしまっていることでしょう。ただ、僕らは未来にきっかけと可能性を残せたと思います。近い将来、この東京学芸大学において様々なシーンで活躍するヤギの姿が見られることを期待しています。



## 辟雍会奨学金について

辟雍会総務部長

佐藤 守



東京学芸大学辟雍会では、懸案になっていました会員に対する支援の一環として、馬渕会長のご提案に基づき、平成29年度から、経済的理由により就学困難な学芸大学学生に対する勉学費の一部支援を目的として、会員の皆さまの会費を財源とする奨学金制度を設けました。

今回は、奨学金Aの初めての募集でしたが、募集期

間の7月5日から7月20日までに60名の学生（学部学生42名、修士学生18名）からの応募があり、その中から32名（学部学生23名、修士学生9名）の学生に奨学金の給付を決定いたしました。

今後も本制度により多くの学生の支援が行えるよう、皆様にはご協力方よろしくお願い申し上げます。

なお、本奨学金制度の概要は以下のとおりです。

### 1. 申請対象者

奨学金A（新入生）：東京学芸大学の入学時に、奨学金募集年度の春学期授業料全額免除を認められた者で申請のあった者のうちから選考します。

奨学金B（在学生）：東京学芸大学在学中に家計急変等により、就学困難な状態に立ち至り、緊急支援奨学金の給付が認められた者で申請のあった者のうちから選考します。

※緊急奨学金とは、日本学生支援機構又は東京学芸大学の緊急支援奨学金のことです。

### 2. 給付額等

この奨学金の給付は在学中一回限りとし、給付金は返還する必要がありません。

奨学金A：一律5万円（ただし、辟雍会の正会員でない場合は、正会員になることが条件です。）

奨学金B：一律2万円（こちらは辟雍会の正会員になることは、特に条件としていません。）

### 3. 申請方法及び期間

奨学金A：申請時に東京学芸大学発行の授業料免除選考結果通知を添え、指定の期日（毎年7月初旬（授業料免除選考結果通知後）から7月下旬）までに辟雍会事務所宛に提出してもらいます。

奨学金B：家計急変等により、緊急支援奨学金の給付が認められた場合、緊急支援奨学金給付決定通知を申請書に添えて、辟雍会事務所宛に隨時提出してもらいます。



## 平成29年度 各部活動報告

### 総務部

総務部は次の七項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

- 1 全国代表者会議、理事会、幹事会等の開催
- 2 東京学芸大学との連絡・調整の実施
- 3 既存の卒業生組織等との交流(総会・新年会等)
- 4 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務等
- 5 機関誌、予算書、決算書、事業計画等の発送
- 6 規則等の整備・見直し
- 7 東京学芸大学辟雍会奨学金給付手続の実施

懸案になっていました会員に対する支援の一環として、平成29年度から、経済的理由により就学困難な学芸大学学生に対する勉学費の一部支援を目的として、奨学金制度を設けました。

(総務部長 佐藤 守)

### 会計部

会計部は予算の作成及び執行を中心に次の活動を行っています。

- 1 平成29年度予算の計画
- 2 予算の適正かつ効率的な執行
- 3 的確な会計事務の実施

(会計部長 佐藤節夫)

### 広報部

広報部は次の3つを中心活動しています。

- 1 機関誌『辟雍』第14号の発行
- 2 ホームページの管理と充実
- 3 広報リーフレットの作成

1は機関誌です。2のホームページは随時更新しています。広報用のリーフレットは今年度版を作成します。

(広報部長 小澤一郎)

### 組織部

昨年度に引き続き、会の組織拡大に努めました。

支部設立事業は、昨年度は設立できませんでしたが、韓国支部設立に向けての準備が進められています。

未加入者への入会依頼を未加入の新入生や学生、卒業生への加入を勧めています。

学生委員との交流授業は、8月2日を予定しましたが、

参加者がなく実現できませんでした。

既存支部の総会や各支部の会合等に積極的に出席しました。

青森県支部、静岡県支部、大分県支部(予定)

### 卒業・修了予定学生への配布物作成

昨年に引き続き、「卒業生・修了生のみなさんへ」(既存支部紹介)という案内パンフレットを配布するとともに、記念品(辟雍会の名称入りボールペン)を贈呈する予定です。

(組織部長 二宮修治)

### 事業部

事業部は、次の活動を行っています。特に11月4日(土)開催のホームカミングデーのイベントに於いて、在日韓国伝統芸術家である金福実氏及びコリアン・フード・コラムニスト八田靖史氏をお招きして、韓国の伝統芸術と料理を披露する舞台と講演を行います。

- 1 学生のキャリア支援事業
  - ①学校教育系学生の近県学校訪問(埼玉9/21、東京私立9/27、神奈川10/5、静岡10/5)
- 2 会員支援事業
  - ①法律ゼミ
  - ②協賛事業
  - ③学生企画事業
  - ④辟雍会学生委員 納涼・流しソーメン交流会(無期延期8/2)
  - ⑤韓国辟雍会(東京学芸大学辟雍会韓国支部)設立表敬訪問(松谷大学校9/11、祥明大学校9/12)
- 3 ホームカミングデー主催事業
  - ①金福実氏及び八田靖史氏による舞台と講演
- 4 キャンパス環境充実支援事業
  - ①岡山県支部協賛による、ご当地桜・県木「醍醐桜と県木の松」の苗木植樹式

(事業部長 荒川悦雄)

## あとがき

大学構内の四季折々の風景は、行き交う人の目と心を潤しています。

『辟雍』第14号をお届けします。

本誌は本会のホームページにも掲載されています。

今年度から始まった辟雍会奨学金の規定については、在学生は必見です。

本会は東京学芸大学の教職員・卒業生のみならず、在学生も会員です。

在学生の花岡凌太さんの学内風景の記事もお見逃しなく。

小澤一郎

発行人	馬渕貞利
編集人	小澤一郎
編集協力	中西文 小柳知代 井上録郎
デザイン	門馬 純
印刷所	(有)サンプロセス

Photo by Noriko Watanabe



学士ネコ「まえ髪ちゃん」  
飯島 和庭園にて



2017年 第14号

東京学芸大学辟雍会機関誌



辟雍第14号  
東京学芸大学辟雍会機関誌

Copyright©2017 Hekiyoukai All Rights Reserved.

[www.hekiyou.com](http://www.hekiyou.com)